

宮城県角田市から学ぶ

かくだ

大震災を経験した姉妹都市

栗山町の姉妹都市、宮城県角田市。昭和53年8月26日、当時の則武基雄栗山町長、三文字正次角田市長によつて姉妹都市協定が結ばれ、今年で35年になる。

角田市は宮城県の南部、仙台市から南に約40キロに位置し、7割を農用地と森林が占める。角田市から仙台空港までは車で約50分、太平洋沿岸へは車で20分ほど。

平成23年3月11日に発生した大地震では東北地方を中心に大きな被害がでた。角田市は内陸のため津波の被害はなかったが、隣接する山元町と亘理町ではあわせて900人を超える方が亡くなった。しかし、津波の影響がないとはいえ、震度6弱



大地震で損傷した道路



人口 約 31,000 人（世帯数約 11,000）
面積 147.58km²（栗山町 203.84km²）
特徴 農業と工業で成り立つ田園都市。国指定の重要文化財が多く存在する歴史のまち

震災で得た教訓を生かして

当 時の状況を、角田市役所の防災担当に聞いた。角田市は震度6弱の地震に襲われた。そして電気・電話・水道など、ありとあらゆるものがとまっていた。中でも特に苦労したのはガソリンだったという。角田市は仙台港付近にある貯蔵施設から石油が供給されているが、この施設が津波の影響をまともに受けた。それに加え、輸送するタンクローリーも流され流通がストップした。いつガソリンの流通が再開するかわからないため、市内にある十数カ所のガソリンスタンドの内、3カ所の協力を得て、給油を市で管理することにした。緊急車

両や災害関係車両、医療関係者に優先的にチケットを発行し、給油を制限することができた。給油制限はガソリンの供給が比較的安定する4月4日まで続いた。

地 震による建物や公共施設などの被害も甚大だった。特に下水道の損傷が激しく約30億円の被害が出た。今年度、復旧の工事がようやく完了する見込みだ。

角田市では隣町の山元町と亘理町で津波の犠牲になった900人以上の遺体が運び込まれた。安置場には廃校になった県立高校の体育館を使い、角田市の職員も遺体運搬

業務に従事したという。震災後、市民の防災への関心や自助や共助の意識が否応なく高まり、行政区の61%で自主防災組織が結成された。これからも増える見込みだ。角田市では震災の教訓を生かし、角田市らしい防災計画を新たに作り直している。



震災後に整備された防災無線。伝達手段が限られたという。震災時は電話が復旧するまで7日間を要した。



水道が市内全域で復旧するまでは15日間を要した。自衛隊や6県14市の自治体が給水車で駆けつけてくれ給水所を設置することができた。

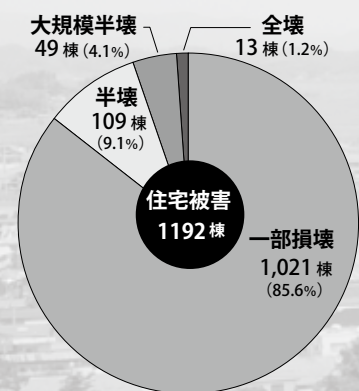
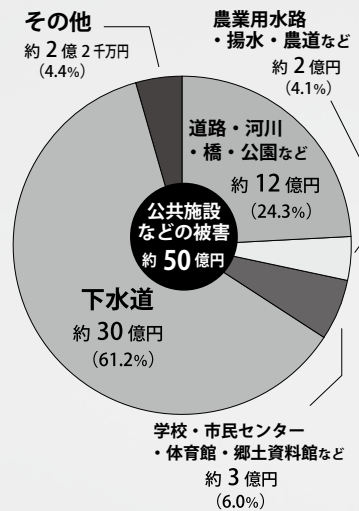
当時の状況を語る角田市の防災担当者



角田市防災安全課 門間政志 参事



角田市防災安全課 仙石利幸 課長



住宅以外にも倉庫など481棟に被害が出た。

ライフラインの被害

種類	被害規模	復旧
電気	市内全域	3月17日※6日後
電話	市内全域	3月18日※7日後
水道	約2,000戸（隅東地区）	3月12日※翌日
	約8,500戸（隅西地区）	3月26日※15日後
下水道	延長 11,370 m	平成25年度完了予定

見えない不安から市民を守る

毎

時0・23マイクロシーベルト。角田市の空間放射線量が国の決めたこの基準値を超え、平成23年12月28日に『汚染状況重点調査地域』に指定された。市では、放射線にいち早く対応するため、放射線対策室を設置した。市は放射線量の測定や除染作業を進めることとなった。

市民の不安を解消するため行っている放射線の対応策を語る角田市の担当者

角田市放射線対策室 佐藤正明室長

角田市放射線対策室 笹森雄一室長補佐

現

在でも、学校や保育園、公園など40施設を毎週、このほかにも市内を1・4方に区切り140カ所を毎月測定している。除染作業の効果や時間が経過したこともあり、市全体の平

子どもたちの元氣を守る

大

人たちが不安で何をしていたかわからず、うろたえていた中でも、子どもたちは元氣だったと荒校長はいう。そんな中、子どもたちの『元氣』は地域の元氣につながるのになんとかして守りたいと考えた。しかし放射線の問題が大きな壁になった。

特に修学旅行や運動会は保護者の理解を得るのに苦労したという。修学旅行は例年通り福島県の会津若松市に行かせてやりたかった。会津若松は子どもたちがとても楽しみにしている場所だった。しかし、当時の福島県はイメージがとても悪かったため、自ら放射線測定器を手に入津若松まで3回の下見を行った。調べた放射線量を保護者に知らせたり、宿泊先で使う食材を確認して安全な食品に変え



角田市立角田小学校 荒宏校長

子どもたちの当時の様子を語る



グラウンドでは元氣に体育の授業が行われてた。



などの放射線量を測定し、市民の不安を和らげている。

均空間放射線量は基準値を下回っているが、市民の不安を解消するため測定はこれからも続く。

また、食に対する不安を解消するため、市では食材などを中心とした持ち込み検査を無料で行っている。約5百万円かけて放射能測定装置を導入した。しいたけなど一部の食品が基準値を超えてしまった。

震災後、角田市では放射線対策として億単位の予算が毎年計上されている。しかし目に見えない市民の不安を取り除くためこれらの対策は続く。

でもらったりと理解を得られるように努めた。結果、子どもたちは会津若松に修学旅行へ行く事ができたと荒校長は語った。

震災後、角田小学校には29人の子どもたちが避難のため転入してきた。そのほとんどが福島県からだった。小学校の卒業を機に戻っていく子や、そのまま角田に残る子どももさまざま。今でも10人以上の子どもたちが在籍している。

角田小学校の校長室や職員室の窓からは子どもたちがグラウンドを元氣に走り回っている様子を見ることができた。

母の願い

Interview 角田市民の声
角田市に住む方にお話を聞いてきました。

5カ月だった息子も2歳に

角田市生まれ・角田市育ちの山田さん。震災時、長男の央稀くんはまだ5カ月。ミルクやおむつなどを家族で分担して買いに行くのが大変だったといいます。放射線の問題では、食べ物を全て手作りにしたり水をミネラルウォーターにしたりと工夫したそうですが、今では市役所で放射線量をお知らせしてくれるので気にしなくなったそうです。子どもたちには自由に育てほしいと願っていました。



山田 瞳さん (33)
前：央稀くん (2)
中：隼冬くん (1)
※3子目を妊娠中

健康で元気な子に育って

福島県南相馬市から避難してきた高崎さん。震災時は、妊娠4カ月で葉奈ちゃんはまだお腹の中にいたそうです。南相馬市では産科の病院がまったく機能なくなってしまい、会津若松市で出産。宮城県内で住居を探し、角田市に住むことに決めました。しかし、仕事の都合でいずれは福島県に戻る予定だそうです。子どもたちには健康で元気に育ってほしいと願っていました。



高崎 里実さん (30)
前：葉奈ちゃん (1)
※2子目を妊娠中

夏の思い出 Memory

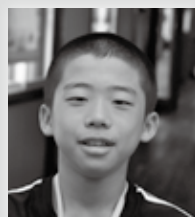
姉妹都市 7月19日～22日 『子ども交歓のつどい』

角田市の子どもたち30人が栗山町を訪れ、『栗っ子』と一緒に夏を思い出をたくさん作りました。



栗山町 角田小学校 (6年) 渡会流雅さん

仲良くなれるか不安だったけど角田市の友だちがたくさんできてよかった。今度は僕が角田市に行って友だちに会いたい。



角田市 角田小学校 (6年) 渡邊海飛さん

栗山町は初めて。仲の良い友だちがたくさんできてうれしい。これからも手紙を書いたりして交流を続けたい。



栗山町 栗山中学校 (2年) 谷田緑さん

遠いところに住んでいる子と友だちになれたことはすごいことだと思う。たくさん友だちとこれからもつながってほしい。



角田市 角田高校 (1年) 向田遥夏さん

栗山町へ来るのは2回目。前に来た時に仲良くなった友だちが角田市に来てくれた時はうれしかった。栗山の自然が大好き。

栗山町は 災害時相互協定を締結します

町では、姉妹都市の宮城県角田市と災害時相互応援に関する協定を締結します。

大規模災害に見舞われた際の支援を、お互いに進めやすくすることや、両自治体の絆をより深めることが目的です。

協定の締結を記念し、くりやま防災講演会を開催します。

講演会では講師に大友喜助角田市長をお招きします。東日本大震災を経験した角田市の状況や、東北地方の今、災害への備えの重要性など貴重なお話をさせていただきますのでぜひご来場ください。



基調講演 角田市における東日本大震災

～復興への道のり～

日時 8月22日 18:30～

場所 カルチャープラザ Eki

講師 宮城県角田市 大友喜助 市長

問い合わせ 町総務課（防災担当）72-1111

入場無料



角田市から津波被害のあった沿岸部自治体に土砂を運ぶダンプ。往来が激しく舗装の破損が目立つ。現在、角田市の土採場は7カ所あるが、近く11カ所に増える見通し。この状況は、テレビでも取り上げられた。国からの補助が望まれる。

復興が進められている中、角田市では新たな問題が広がっている。津波被害のあった沿岸部へ大量の土砂を運ぶため、国交省・林野庁などの大型ダンプが頻繁に行き交い、道路の舗装が傷められていた。また、

取材を終えて 角田市には四方山という市民に愛されている見晴らしの良い山がある。頂上からは太平洋沿岸が眼下に広がり、そこへ行くと角田市民にとって沿岸部の自治体や海は身近なものだと感じることができる。

誰も辛い時、それでも「自分には何が出来るのか」、そう考え行動した人たちが角田市にはたくさんいた。ボランティアや、消防団、パトロール、炊き出し……。その中にはたくさんの子どもたちの姿もあった。子どもが元気であれば地域も元気になる。角田市は震災を乗り越え、明るい未来が待っているだろう。

角田小学校を訪れた際、震災から一年後に作られたという貴重な文集をいただいた。子どもたちや先生、保護者の思いが伝わっている。小学生が書いたとは思えないような生々しいものや、辛い経験が書かれていた。一方で、保護者からは、家族や地域の人たちの存在の大きさを感じられるものが多くあった。震災という危機に直面した時、人が一番に求めたのは『人』だったようだ。

地域に住む子どもたちは登下校が危険なためスクールバスでの登校を余儀なくされていた。直接の津波被害からは逃れたものの、間接的な被害が広がっていた。

参加したボランティアスタッフは老若男女さまざま。延べ829人が参加した。避難所は15カ所、避難者総数は1万3千人、角田市外からも700人を超えた。



大地震から4日後、角田市社会福祉協議会に『角田市災害ボランティアセンター』が開設された。佐藤由紀子さんもボランティアに参加したその一人。佐藤さんの主な仕事は避難所の清掃や、仮住居として使う空き家の清掃だ。一緒に活動するボランティアのメンバーにはたくさんの子ももちがいた。子どもたちは友だち同士で声を掛け合っていて、みんな元気で、集まった子どもたちは文句も言わずに辛い仕事をやり遂げていった。佐藤さんは、「近頃の若い子は、若い子に対して偏見があったが、それは間違いだった。子どもたちは地域の一員としてみんなに元気で勇気を与えていた」と目を細めていた。



当時の様子を語るボランティアの佐藤さん

ボランティアセンターの当時の様子や、これからの課題を語ってくれた。



角田市社会福祉協議会 岡本圭一郎 係長



角田市社会福祉協議会 太田文夫 事務局長

ボランティアセンターの当時の様子や、これからの課題を語ってくれた。

ボランティアセンターは開設していた56日間、延べ829人の参加があった。中には勤めていた病院が休業したため参加してくれなかった看護師や、困っている外国人がいればと外国語が得意な方なども参加してくれた。

社会福祉協議会では、こうしたボランティアを見て地域の絆が再び生まれてきたと手ごたえを感じたという。中でも子どもたちの活躍は目を見張るものがあった。子どもたちが地域の一員としていろいろなことに参加するようにアプローチをしていくことがこれからの課題だと話していた。

Interview 角田市民の声

角田市に住む方にお話を聞いてきました。

3つの理念でまちを活性化



株式会社 岸浪園 岸浪俊一さん

角田市の特産品『梅』の生産者の岸浪俊一さん。岸浪さんは十数年前、品質に自信があるのに値がつかない『梅の商品価値をいかに高めるか』と考えたそうです。梅干しや梅酒などに加工したり、イベントを企画したりと、季節性・話題性・社会性の3つの理念をもとに取り組んだといいます。いまでは角田市の梅は宮城県一といわれるほどに。ぜひ角田市の梅を食べてくださいと胸を張って言っていました。

まちへの想い

観光客がたくさん増えた



ぜいご屋 ふふ (日本料理屋) 安斉信子さん

角田市で日本料理屋を営む安斉信子さん。『ぜいご屋』の『ぜいご』とは田舎料理をさすそうです。大地震が来たときは10日間も店を開けられなかったといいます。それでも毎日来てくれるお客さんがいたそうです。市で観光に力を入れてくれているおかげで、たくさんの観光客がくるようになったと喜んでいました。